

中国古代都城の初期形態

許 宏[※]

訳 徳 留 大 輔

一

数多く古籍が存在する中国において、城と築城に関する記載、古典籍は非常に多い。今なお依然としてそびえ立って地上に存在する古城壁が看取される。さらに地下に埋没している事例もあり、発掘を通してその状況が分かる。ずらりと並んだ里坊あるいは胡同、およびそれらを囲む高くて巨大な城郭、中古以降から帝国の都城への最も鮮明な物質文化における表象として構成されている。

一般的に、そして学術界においても、「無邑不城（邑なくば城にあらず）」は中国都城の一つの顕著な特色であることが強調されてきた。しかし、詳細に検討を加えると、このことは中国古代の都城の発展における一貫した特徴ではなく、明らかに段階性が存在するといえる。数十年における考古発掘と研究を通して、学術界ではおよそその共通認識が形成されるにいたったが、それは南北向きに都城の大・中軸線が伸び、城郭内には坊が規則正しく分布しており、それが北魏洛陽城と曹魏時期の都城である鄴城の段階にまで遡るということである。一方でそれ以前に関していえば、例えば後漢洛陽城、前漢長安城、先秦時期の都城は、そのような規範や要素が備わっていたわけではない。中国の古代都城の早期段階はどのような発展の軌跡を辿ったのであろうか。緩やかな単一的な進化を遂げたのであろうか。あるいは重大な変異あるいは波動があったのであろうか。城郭を備える状態は主流であったのであろうか。その背後にはどのような要因があったのであろうか。中国古代都城さらには古代社会の発展過程における大きな問題であり、学術界においても非常に注目されている。

考古資料に基づき、我々の考え方を示す前に、まず関連する概念について整理しておきたい。

城という考え方の中で、郭とは城の外側を囲む城壁である。集落形態という視点から見ると、郭とは集落を取り囲む防御施設である。郭が出現した後、郭は大城、郭城、外城、外郭などの様々な異なる呼称があるが、いずれにせよその意図するところは明らかである。郭の存在は城を考える上での前提であり、（内）城がなければ、郭を語ることもなく、ただ集落を取り囲む施設として「城」が存在するようになる。城郭という視点からすれば、本論では「大都無城」の「城」とは、集落の外側を囲む城の城壁をさすことになる。

ここではさらに「郭区」という重要な概念についても説明しておきたい。拙著『先秦城市考古学研究』（北京燕山出版社、2000年）の中で、夏商西周時期の都邑は内城外郭の雛形が出現しており、ただ郭城城壁がほとんど見られない状況であることを指摘した。当時の都邑遺址はいずれも宮廟基址群お

※ 中国社会科学院考古研究所

よびその周囲には広大な郭区（一般の居住民区、手工業作坊と墓地などを含む）が構成されていた。

外郭に対して、城は小城とも称される。内城は壁に囲まれた集落の一部分の空間を指している。これは集落の空間であり、ますますもって特殊な機能を備える。都城遺址の中で、それらの多くは貴族あるいは統治者が所有し、一般的には宮殿区に属しており、このことから宮城とも称されている。上述した小城、内城の類は、規模あるいは空間内に配置された位置という視点から命名されている。もちろん曖昧ではあるが、非常に包括的である。しかし宮城の命名は、属性の角度から与えられており、意味は明確であるが非常に排他的であり、この概念を使用するとかえって異議を誘発させやすいのである。

小城、内城、宮城という用語はそのために非常に混乱しており、その現象は現在まで続いている。かりに簡単に整理してみると、内城（小城）は宮城を包括したものとしても定義付けることも可能である。いわゆる広義の宮城、すなわち内城の区域であり、漢魏時期の後、次第に皇城の性質をもつようになる。隋唐時代にいたると、宮廷および朝廷の事務機構を主とする皇城区域が明確になってくる。

二

都城遺址の考古学的資料を通して、我々が認識する「大都無城（大きな都は城がない）」は漢代およびそれ以前の中国の古代都城の主流形態であることが分かってきた。以下に段階に従って分析を加えたい。

（一）二里頭から西周時代：「大都無城」が主流

紀元前1800年前後、各地の文明社会が相次いで衰退する中で、中国では東北アジアでもっとも最初の、明確な規格性のある都市である大型の都邑、二里頭が中原地域の洛陽盆地で出現した。少なくとも二里頭文化早期には出現している。二里頭都邑の規模は既に300万㎡以上に達しており、明確な機能の分化が認められ、中心区では相前後して10万㎡の宮城、大型の壁に囲まれた作坊（工房）区と縦横に交錯する都市の主要な道路が作られた。しかし半世紀における考古学的発掘調査が行われたにもかかわらず、集落の防護施設となる囲壁は発見されておらず、集落の縁辺部に不連続の溝状の遺構が確認されているにすぎない。ただしその遺構は空間を区画する機能をもっていたものと思われる。二里頭時代に入り、集落内部の社会における階層分化がより進むことが知られているが、それと同時に、対外的な防御施設の機能は相対的に弱まっている。

商王朝二里岡期になると、二里岡文化は急速に二里頭文化の分布区に広がり、さらにそれ以上に拡大しており、集落形態と社会構造もさらに複雑化が進む。鄭州商城と偃師商城はいずれも城郭をもち、強力な防御性を備え、まさに軍事目的にあわせて計画的に設置されている。全体的にみると、鄭州商城は商王朝の主都であり、偃師商城は軍事的色彩を濃く備え、また産物を貯蔵あるいは輸送する機能を備えた二次的センター、あるいは副都との考え方が妥当なものと思われる。

その後、豫北の洹河兩岸一帯に商王朝の都邑が勃興し、殷墟遺址群が繁栄へと向かっていく。

殷墟が建都された初めの頃、その都市の中心は洹北に位置し、そこに宮殿と宮城が建造された。しかしそれは長くは続かず、宮殿建築の大部分は火災により焼失している。集落の周囲には面積4.7km²の方形の壕が巡っている。現在のところはまだ理由は不明ではあるが、溝を掘ってすぐにその壕は埋め戻され、都城の中心は洹南に移っている。洹南小屯宮殿宗廟区と洹北西北岡王陵区は200年余りの期間、中心としての機能を果たすことになる。人口も増加し、社会の繁栄により、殷墟都邑は規模も徐々に大きくなり、その構造も複雑になる。集落の規模は36km²に達する。現在、発掘調査が始まっ

て80年余りを経過するが、今のところまだ郭城の痕跡は検出されていない。

表一 中国古代都城郭形態一覧表

段階	王朝	宮城 + 郭区	宮城 + 郭城		都城の存続時期
			内城外郭	城郭並立	
防御性城郭時代	夏?	二里頭			1700-1500BC
	商		鄭州城、偃師城		1500-1350BC
		小双橋、洹北城、殷墟			1300-1000BC
	西周	豊鎬、岐邑、洛邑、齊都臨淄、魯都曲阜			1000-771BC
	春秋	洛陽王城、晋都新田、秦雍城、楚郢都	齊都臨淄、魯都曲阜、鄭都新鄭		770-403BC
	戦国			洛陽王城、齊都臨淄、魯都曲阜、韓都新鄭、趙都邯鄲、楚郢都、燕下都	403-221BC
		秦都咸陽 (350-221BC)			
	秦	咸陽			221-207BC
	前漢 - 新莽	長安			202BC-23AD
後漢	洛陽			25-190	
儀礼性城郭時代	曹魏 - 北齊		鄴城		204-577
	北魏		洛陽城		494-534
	隋唐		隋大興唐長安城		582-904
			東都洛陽城		605-907
	北宋		汴梁城		960-1127
	金		中都城		1153-1214
	元		大都城		1267-1368
	明清		北京城		1421-1911

とにかく、約200年もの間、軍事的色彩の強い二里頭時代を経て、殷墟の集落形態は再び二里頭都邑に類似した様相を呈しており、そして正式に西周王朝期で約500年続く、「大都無城」の段階を迎えるのである。

陝西関中西部の周原は、総面積は約30km²キロである。最初の頃は周人が商を滅ぼす前の都城であり、最終的には西周王朝は周人の祖廟の所在地、また王朝の諸貴族の重要な居住地でもある。数十年に考古学的調査が行われているが、いまのところ城壁が存在した痕跡は認められない。研究者の中には、版築による囲壁を備えるものとは異なる城の類型であると認識する見解がある。すなわち、「山や河などの自然地形を利用し、そこに溝を掘り、河川と溝と台地による城」である。

西周王朝の都城である豊京と鎬京遺址は、西安市の南西灃河の両岸に所在する。総面積は10数km²に達する。西周王朝の都城豊鎬遺址の範囲内においても、依然として版築城壁あるは環濠などの防御施設は発見されていない。豊京遺址では新たに広大な規模の自然水面あるいは沼沢地で構成され、天然の障壁が構成されていたことになる。鎬京の周りは、数条の河の水路が天然の境界をなす河川と堀の溝を形成していた。

西周の初期の頃、周王朝は洛陽に東都である洛邑を設置した。それは東方の経営に着手するために、政権の重要な基地の強化を目指したものであった。考古発見から見ると、西周文化遺存は灃河兩岸一帯に分布が集中しているが、未だに城壁は発見されていない。

以上のことから、商代前期の特殊な歴史段階の城郭形態を除くと、「大都無城」は広域王権国家時代における都邑制度の主流であったことが分かる。

(二) 春秋戦国時代：乱世における防御性城郭の興り

春秋戦国時代に入ると、政治的に列国は分立、自立し、戦争も頻繁に起こり、防御機能をそなえる城郭の空間構造が生まれた（図1）。

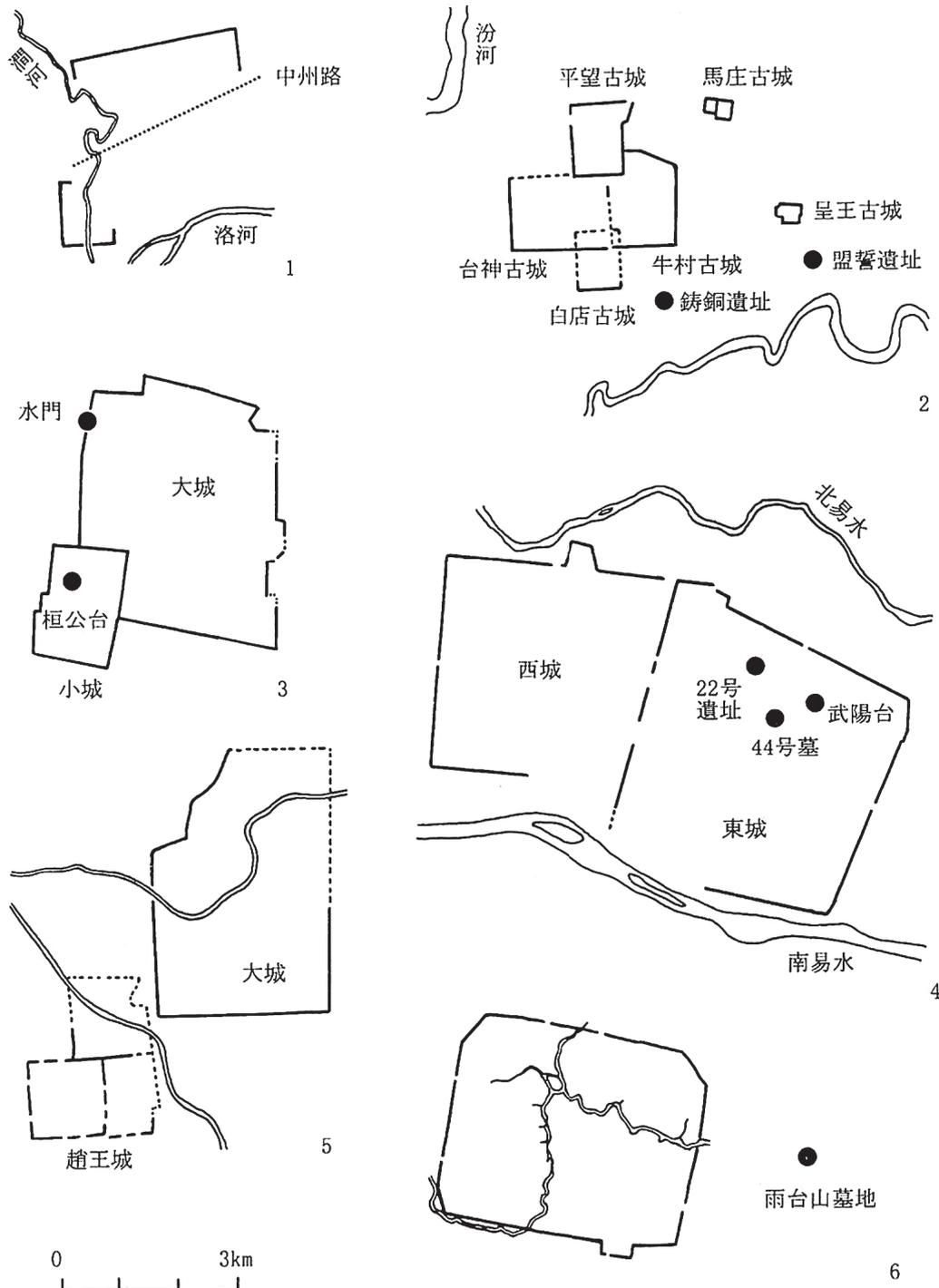


図1 東周列国都城の比較

春秋時代の都邑においても、それ以前の「大都無城」の形態を残しているものもある。例えば山西侯馬の晋国都城新田の空間構造は無外郭城である。一方で洛陽東周王城は、新しい考古発見が見られ、それは戦国時代に城壁が築造され始めている。類似した状況は楚国郢都紀南城にも見られる。

文献資料に依拠して春秋戦国時代の城郭構造を復元する研究者の中には、宮城を城郭の中に設置する「内城外郭」がこの時代の城郭構造の正体であると認識する学者もいる。一方で考古資料から見ると、戦国時代に新しく建造あるいは改修された都城の構造は一変しており、宮城が郭外に移っていたり、城郭の一部を利用して宮城にするという新しい分布構造が出現している。これは簡潔にまとめると「内城外郭」から「城郭並立」への変化ということになる。

城、郭と関係について、戦国時代の列国の都城は大きく2種類に分けることができる。一つは宮城が郭外の外にあるものである。例えば臨淄齊故城、邯鄲趙故城などである。もう一つは、郭城の一部を利用して宮城にするものである。例えば曲阜魯故城、新鄭韓故城、易県燕下都（東城は河道を利用して宮城と郭城を分割しており、西城は郭に付随している）、洛陽東周王城、楚紀南城はこの事例に帰属する。

（三）秦から後漢時代：「大都無城」の新段階

この数十年の考古学的調査の中で、この地区では大量の秦都咸陽に関連する各種類の遺存が発見されているが、しかし現在までのところまだ外城の城壁は発見されておらず、都城の空間分布における構造もあまりよく分かっていない（図2）。

この秦都咸陽遺址に城壁が見られない現象をどのように解釈するのかに関して、様々な見解がある。「城が存在する説」では、渭河の氾濫により城址は削平され現在みられない、あるいは一部は流されずに残っている可能性があるという見解である。それに対して、「無城説」では、これまで一貫してこの一帯で城壁のいかなる痕跡も発見していないこと、そして「咸陽に関する文献記載は、多くは宮（中）に関しては詳しいが、城に関しては略されている」ということに依拠している。「無城説」を唱える学者は、秦都咸陽は統一的な計画に基づいて広がった開放性が不足しており、その範囲は渭北からだんだんと渭水以南まで拡大して、最終的に渭水両岸にまたがる規模にまで形成したと認識している。

現在、西安市の西北郊外に所在する漢長安城は、前漢王朝と新莽王朝の都城である（図2、3）。この城址は内城であるのか、外郭であるのか、いまだに結論をみない。漢の長安城が発見されて以来の主要な観点は、30数km²の城址は漢長安城の外郭城であるとの見解である。歴史学者の楊寛氏は、それは宮城（即ち内城）に属すると認識しており、「長安城内には、主に皇宮、官署（政府機関）、附属機関と高官位の人、諸侯王、列侯、郡守の邸宅があった。一般の民が居住する『里』の面積は大きくない」としている。これに対して、長安城の考古発掘調査を長らく行ってきた劉慶柱氏は否定的な見解である。しかし『漢長安城』（文物出版社、2003年）の中で、城外の礼制建築、離宮と苑、さらには漢長安城付近の諸陵邑まで含めて報告を行っている。このことから、漢長安城の城の囲いを城郭と考える学者においても、上述した城の囲い以外の部分を否定するわけではなく、漢長安城の重要な構成要素であると考えている。

楊寛氏は長安都城には、内城と外郭が包括されていると考えている。先秦から漢代の郭区を論じる中で、楊寛氏は「天然の山水を連結させ、外郭の障壁として利用することは、もとは西周春秋以来、流行した方法である。外郭の障壁として輸送用の河川を用いる方法は前漢長安で始まった方法である」と指摘している。漢の長安城に「大郭」を認めない立場である劉慶柱氏も、「前漢中期、漢の武帝は漕渠（官営漕運のできる人工水渠）を修築した。（中略）長安城以東に一つ障壁を形成した。前漢中期以降、この漕渠と宣平門以東の道が交錯する箇所を東郭門（東都門）と称した」と述べている。東郭門が存在することは、長安城と輸送用の漕渠の間にみられる「東郭」の問題に関して、両者の観点はおよそ同じである。

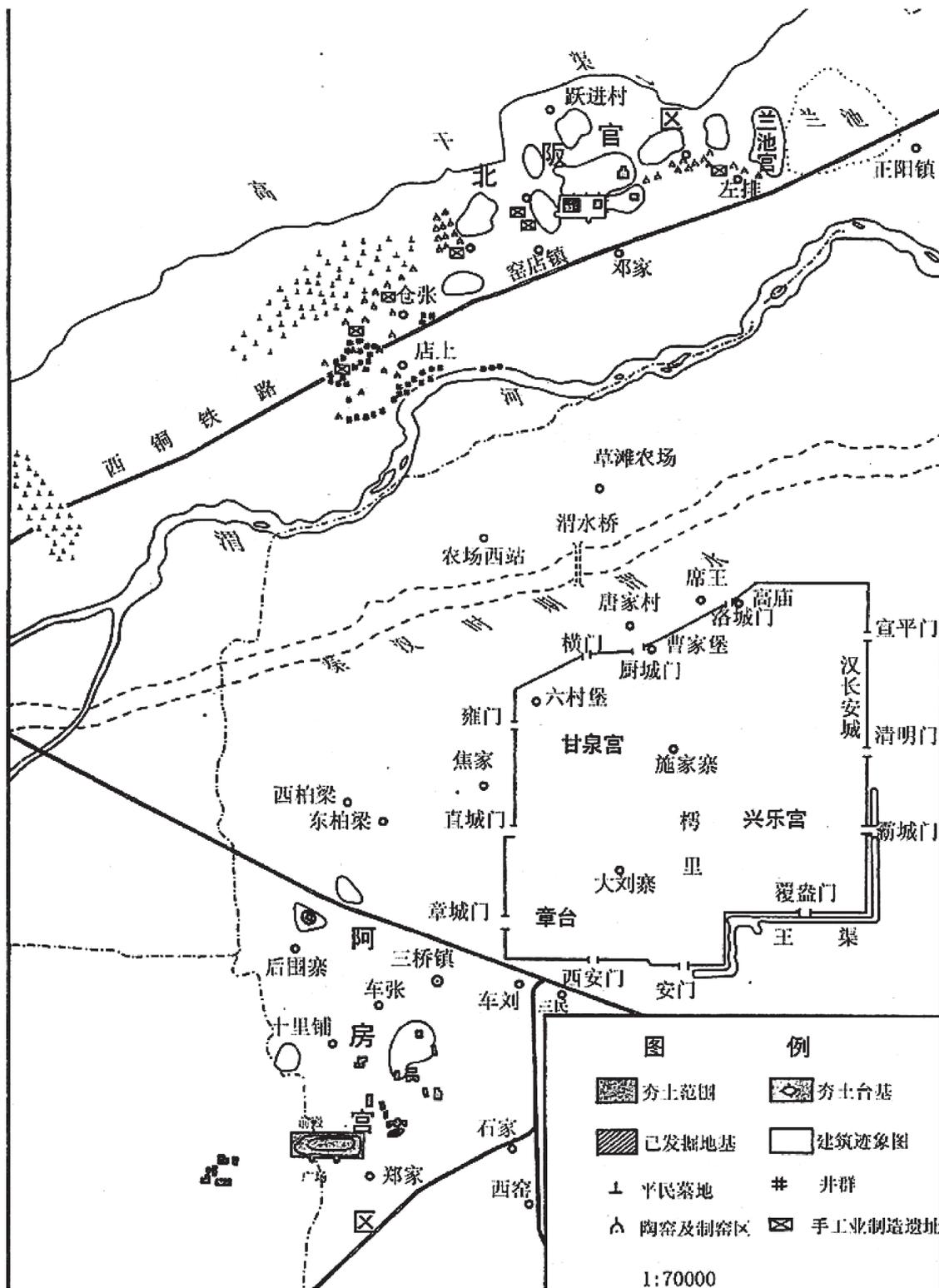


图2 秦的咸陽城と漢の長安城

類似する議論は後漢洛陽城の性質に対しても行われてきた。それは後漢洛陽城における城壁の性質に関して注目されてきたが、楊寬氏は洛陽は全体が「皇城（内城）」の性質を帯びると認識している。

全体的に見て、たしかに後漢洛陽城の宮殿の面積は、城の全体の面積の2分の1前後に達しており、依然として宮殿が都城の構造における主体である段階である。住民の里と市はそれに従属するように位置づけられている。

その他、後漢洛陽城はかなり大きな郭区が存在しているが、実際の防御機能をもつ郭城城壁は備わっていない。楊寛氏は『洛陽伽藍記』などの古文献を分析する中で、漢魏洛陽は前漢の長安と同様、天然の河川と新しく作った漕渠を用いて郭区の障壁にした、あるいは橋と外郭の亭をいわゆる関所と指摘している。そして「漢魏洛陽は前漢の長安と同じ構造であり、このことは後漢の都城の建設は前漢の制度をそのまま継承したのである」と指摘している。

先述したように、曹魏鄴城と北魏洛陽城の外郭の城壁の建造により、「大都無城」の都城形態は最終的に歴史の舞台から消えることになったのである。

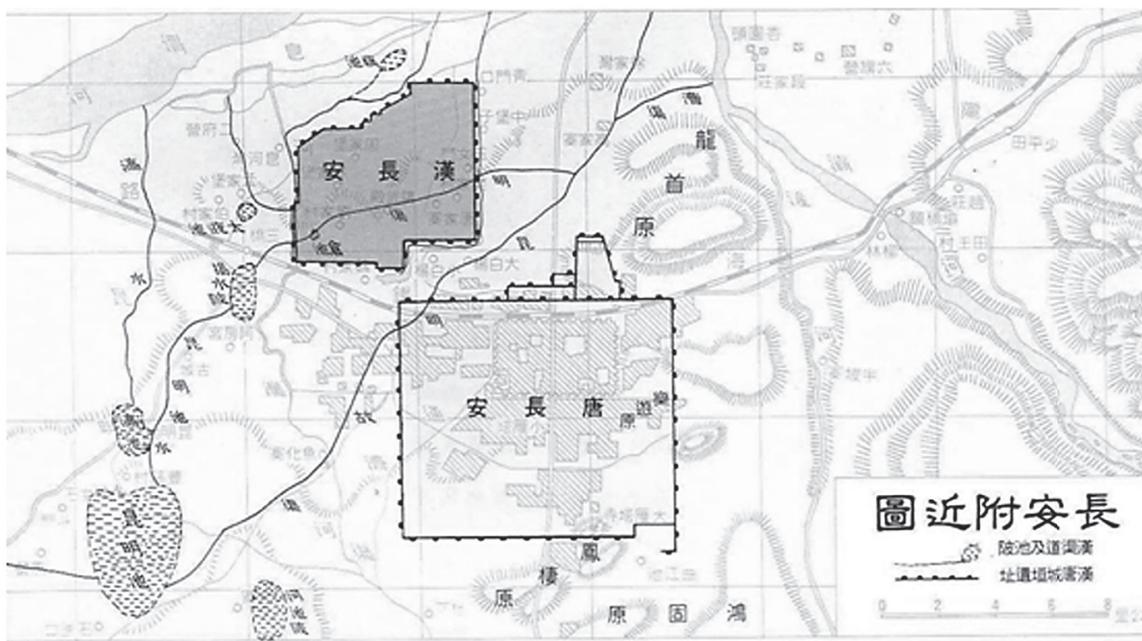


図3 漢の長安城と隋唐長安城の首都圏

三

先秦から秦漢時期の都城の発展の検討を通して、我々は中国古代都城史において城郭の形態の違いで、2つの大きな段階があることが認識できる。つまり防御的性格をおびる城郭段階と儀礼的性格をもつ城郭段階（表1）である。以下に、中国の初期都城の発展史におけるいくつかの重要な現象を指摘しておきたい。

(1) 最古の広域王権国家都邑二里头から曹魏鄴城における二千年の期間、「宮城+郭区」の配置であり、「宮城+郭城」の配置ではなかった。これが都城空間の構造の主流であり、この現象は「大都無城」とまとめることができる。これと広域王権国家の勢力が強まり、軍事、外交の優位性が、「移民都市」の住民により複雑化をもたらし、また都城の所在する自然条件の十分な利用と、当時の「天下」「宇内」思想など、いずれも一定の関連がある。

(2) その間、商前期と春秋戦国の両時期は城郭構造が隆盛しており、いずれも特殊な歴史的背景を

有しており、軍事的に非常に緊張した状況であったことが共通している。

(3) 戦国時代の城郭が並立する状況は、社会矛盾が先鋭化し、列国が対峙するという状況から生まれたものであり、この時代の特徴的なものであり、また中国古代都城史における前後の時代を繋ぐ脈絡の中で位置づけられるものである。

(4) 都城発展史における初期段階の防御性城郭の実用性については、城郭の有無は政治、軍事、地理などの諸要素によるものであり、「大都無城」の集落の形態はこの歴史的背景による産物である。その後におこる、全城を貫く大中軸線を存在する儀礼的性質をもつ城郭は、同時に権力をもつ階級のシンボリックな意義も備えており、漢代以降における城と郭を有する都城へと発展していくのである。

中国古代都城的早期形态

许 宏

一

在卷帙浩繁的中国古典文献中，关于城与筑城的记载不绝于书；至今仍耸立于地面之上的古城墙也不鲜见。至于湮没于地下、经发掘出土者，更是比比皆是。鳞次栉比的里坊或胡同，以及将它们圈围起来的高大城郭，构成了中古以后帝国都城最鲜明的物化表征。

所以不惟公众，即便学术界，一般也是把“无邑不城”作为中国古代都城的一个显著特色来加以强调的。但细加分析，就不难发现这一特征并非贯穿中国古代都城发展的始末，而是有其鲜明的阶段性。历数十年的田野工作与研究，学术界取得的大体共识是，拥有南北向长距离的都城大中轴线、城郭里坊齐备的古都布局，可以上溯到北魏洛阳城和曹魏时期的都城——邺城。再往前，如东汉洛阳城、西汉长安城乃至更早的先秦时期的都城，就不是那么形制规范、要素齐备了。中国古代都城的早期阶段有着怎样的发展轨迹？是单线平缓“进化”，还是有重大“变异”和波动？城郭齐备的状态是主流吗？其背后的动因又如何？如此种种，都是关涉中国古代都城甚至古代社会发展进程的大问题，因而成为学术界关注的焦点。

在梳理考古材料，提出我们的看法之前，拟先对相关概念做一界定。

与城相对，郭是在城的外围加筑的一道城墙。从聚落形态上看，郭是圈围起整个聚落的防御设施。在郭出现之后，郭虽有大城、郭城、外城、外郭城等不同的称呼，但其意甚明。既然郭的存在以城为前提，没有（内）城，郭则无从谈起，圈围起整个聚落的防御设施也就只能称为“城”。从城郭的视角看，本文所提出的“大都无城”之“城”，指的就是这种聚落外围的城垣。

这里还有必要对本文中的一个重要概念——“郭区”加以重申。在拙著《先秦城市考古学研究》（北京燕山出版社，2000年）中，本人已指出夏商西周时期都邑之布局已初具内城外郭这两大部分的雏形，但罕见郭城城垣。当时的都邑遗址大都由宫庙基址群及周围的广大郭区（含一般居民区、手工业作坊和墓地等）组成。

相对于外郭，城又被称为小城、内城，指的是被圈围起的聚落的一部分空间。这部分聚落空间，往往具有特殊的功用。在都城遗址中，它们多为贵族或统治者所有，属于一般意义的宫殿区，故这类区域也往往被称作宫城。上述小城、内城之类，是从规模或空间位置的角度给出的命名，虽然模糊但具有很大的包容性，而宫城的命名，则是从属性的角度给出的，意义明确但具有较强的排他性，使用时反而容易引发异议。

小城、内城、宫城在称谓上的混乱，由来已久且持续至今。如果稍加整合，内城（小城）可以定义为等于或包含宫城。相当于广义的宫城即内城的区域，在汉魏之后逐渐具有皇城的性质。至隋唐时期，以宫廷服务机构和朝廷办事机构为主的皇城区域正式被明确下来。

二

通过对都城遗址考古材料的梳理，我们认为“大都无城”是汉代及其以前中国古代都城的主流形态。以下即分阶段对此加以分析。

（一）二里头至西周时代：“大都无城”是主流

约公元前1800年前后，伴随着区域性文明中心的先后衰落，中国乃至东亚地区最早的具有明确城市规划的大型都邑——二里头出现于中原腹地的洛阳盆地。至少自二里头文化早期始，二里头都邑的规模已达300万平方米以上，具有明确的功能分区，在其中心区先后出现了面积逾10万平方米的宫城、大型围垣作坊区和纵横交错的城市主干道等重要遗存。但在逾半世纪的田野工作中，却一直没有发现圈围起整个聚落的防御设施，仅知在边缘地带分布着不相连属的沟状遗迹，应具有区划的作用。可知，进入二里头时代，聚落内部社会层级间的区隔得到强化；与此同时，对外防御设施则相对弱化。

表一 中国古代都城城郭形态一览表

阶段	朝代	宫城 + 郭区	宫城 + 郭城		都城存废时间
			内城外郭	城郭并立	
防御性城郭时代	夏?	二里头			1700-1500BC
	商		郑州城、偃师城		1500-1350BC
		小双桥、洹北城、殷墟			1300-1000BC
	西周	丰镐、岐邑、洛邑、齐都临淄、鲁都曲阜			1000-771BC
	春秋	洛阳王城、晋都新田、秦雍城、楚郢都	齐都临淄、鲁都曲阜、郑都新郑		770-403BC
	战国			洛阳王城、齐都临淄、鲁都曲阜、韩都新郑、赵都邯郸、楚郢都、燕下都	403-221BC
		秦都咸阳 (350-221BC)			
	秦	咸阳			221-207BC
西汉 - 新莽	长安			202BC-23AD	
东汉	洛阳			25-190	
礼仪性城郭时代	曹魏 - 北齐		邺城		204-577
	北魏		洛阳城		494-534
	隋唐		隋大兴唐长安城		582-904
			东都洛阳城		605-907
	北宋		汴梁城		960-1127
	金		中都城		1153-1214
	元		大都城		1267-1368
	明清		北京城		1421-1911

到了商王朝二里岗期，二里岗文化不仅迅速覆盖了二里头文化的分布区，而且分布范围进一步扩大，聚落形态和社会结构都有极大的飞跃。郑州商城和偃师商城都围以城郭，有极强的防御性，应是出于军事目的而有计划设置的。总体上看，郑州商城为商王朝主都，偃师商城是军事色彩浓厚且具有仓储转运功能的次级中心或辅都的意见应是较为妥当的。

随后，洹河两岸一带作为商王朝的都邑崛起于豫北，殷墟遗址群开始走向繁荣。

殷墟建都初期，其城市重心在洹北。以洹北为中心，开始营建宫殿区和宫城，但不久，大片宫殿建筑即被火焚毁，在聚落周围挖建了圈围面积达4.7平方公里的方壕。出于我们还不知道的原因，刚刚挖就的方壕随即被草草回填，都城的重心即移到了洹南。以洹南小屯宫殿宗庙区和洹北西北冈王陵区为中心的200余年的时间里，随着人口的增多和社会的繁荣，殷墟都邑经历了规模由小到大、结构逐渐复杂的过程，聚落总面积达36平方公里。但在80余年的田野考古工作中同样未发现外郭城的迹象。

无论如何，在相隔了约200年军事攻防色彩浓烈的二里岗时代后，殷墟的聚落形态又呈现出与二里头都邑相近的状况，并正式进入了至西周王朝结束近500年“大都无城”的阶段。

位于陕西关中西部的周原，总面积约30平方公里，先为周人灭商前的都城，终西周王朝则一直是周人祖庙之所在，也是王朝诸多贵族的重要聚居地。在数十年的考古工作中也一直没有发现城垣的迹象。有学者认为这是不同于夯土围城的另一种城的类型，即“因自然山水地形地貌加以修整（挖掘）而成的河沟台地塹城”。

西周王朝的都城——丰京和镐京遗址，地处西安市西南沣河两岸，总面积达10余平方公里。在西周王朝的都城丰镐遗址范围内，也尚未发现夯土城垣或围壕等防御设施。丰京遗址新发现的面积广大的自然水面或沼泽地构成了天然的屏障。至于镐京外围，数条河流水道形成了天然界河和塹沟。

西周初年，周王朝即着手在洛阳营建东都洛邑，作为经营东方、巩固政权的重要基地。从考古发现上看，西周文化遗存集中分布在灋河两岸一带，但迄今未发现城垣。

综上所述，除了商代前期这一特殊历史阶段的城郭形态，“大都无城”是广域王权国家时代都邑制度的主流。

（二）春秋战国时代：兴于乱世的防御性城郭

进入春秋战国时代，政治上列国分立，各自立都，军事上兼并战争频繁，具有防御功能的城郭布局应运而生。

在春秋时期的都邑中，我们还能看到上一个时代“大都无城”形态的残留。如位于山西侯马的晋国都城新田布局松散，并无外郭城；而洛阳东周王城，新的考古发现表明其城墙应始筑于战国时期。类似情况也见于楚国郢都纪南城。

有学者主要依据文献资料对春秋战国时期的城郭布局进行了复原，认为将宫城置于郭城之中也即“内城外郭”是这一时期城郭布局的正体。与此形成鲜明对比的是，从现有的考古材料看，凡战国时期新建或改建的都城，格局都为之一变，出现了将宫城迁至郭外或割取郭城的一部分为宫城的新布局。这种变化似乎还可以更为简洁地概括为从“内城外郭”变为“城郭并立”。

就城、郭的相对位置而言，战国时期的列国都城大体可分为两类。一是宫城在郭城之外，如临淄齐故城、邯郸赵故城等；二是割取郭城的一部分为宫城，如曲阜鲁故城、新郑韩故城、易县燕下都（东城利用河道分割宫城与郭城，西城则为附郭），洛阳东周王城、楚都纪南城似乎也可归入此类。

（三）秦至东汉时代：“大都无城”的新阶段

战国中晚期秦国及秦王朝（秦代）都城咸阳遗址，地处关中平原中部的咸阳原上、渭水两岸。虽然数十年的考古工作中在这一区域发现了大量与秦都咸阳密切相关的各类遗存，但迄今尚未发现外城城垣，都城的布局结构也不甚清楚。

如何解释秦都咸阳遗址不见城垣的考古现状，学者们意见殊异。持“有城说”的学者或倾向于城址全毁于渭河的冲决，或认为其主要部分并未被冲掉。针对上述说法，持“无城说”的学者指出，迄今在这一带没有发现有关城墙的任何痕迹，而“有关咸阳的文献记载，多是详宫而略城的”。持“无城说”的学者认为，秦都咸阳是一个缺乏统一规划思想指导的不断扩展的开放性城市，其范围从渭北逐步扩大到渭水以南，最终形成了横跨渭水两岸的规模。

位于现西安市西北郊的汉长安城，是西汉王朝和新莽王朝的都城，该城址究竟是内城还是外郭，学术界莫衷一是。针对汉长安城发现以来的主流观点——30多平方公里的城址就是汉长安城的外郭城，历史学家杨宽认为其很明显的属于宫城（即内城）的性质，“长安城内，主要是皇宫、官署、附属机构以及达官贵人、诸侯王、列侯、郡守的邸第。一般居民的‘里’所占的面积是不大的”。对此，主持长安城田野考古工作的刘庆柱则持否定的态度。但其撰写的《汉长安城》一书（文物出版社，2003年）的章

节和附图，就包括城外的礼制建筑、离宫和苑囿，甚至汉长安城附近的诸陵邑。可见即便坚持认为汉长安城的城圈即郭城的学者，也不否认上述城圈以外的部分，属于汉长安城的重要组成部分。

杨宽认为整个长安都城，应该包括内城和外郭。论及先秦至汉代的郭区，杨宽认为“利用天然的山水加以连结，用作外郭的屏障，原是西周春秋以来流行的办法。兼用遭运的河流作为外郭的屏障，是西汉长安所开创的办法”。而不认同汉长安城有“大郭”的刘庆柱也承认，“西汉中期，汉武帝修筑漕渠……形成了汉长安城以东的一条屏障，西汉中期以后，人们也就把这条渠与宣平门以东的祖道交汇处称为‘东郭门’（即东都门）”。可见在东郭门的存在、时人习惯于把长安城和漕渠之间视为“东郭”的问题上，二者的观点已大致趋同。

类似的争议延伸到了对东汉洛阳城性质的论定上。与叙述东汉洛阳城仅限于城圈的主流观点相左，杨宽认为洛阳整个城属于“皇城”（内城）性质。的确，总体上看，东汉洛阳城内宫苑面积也达全城总面积的二分之一左右，仍处于以宫室为主体的都城布局阶段。相比之下，对居民里间与商市的安排则处于从属地位。

另外，东汉洛阳城已有较大的郭区，但尚无具有实际防御作用的郭城城垣。杨宽据对《洛阳伽蓝记》等古文献的分析指出，汉魏洛阳与西汉长安一样，以天然河流与新开漕渠作郭区的屏障，同样以桥梁与郭门作为郭区的门户，或者以桥梁与外郭亭作为郭区的关口。而“汉魏洛阳之所以会有与西汉长安如此相同的结构，该是东汉都城的建设沿用了西汉的制度”。

如前所述，随着曹魏邺城和北魏洛阳城外郭城垣的兴建，“大都无城”的都城形态才最终退出了历史舞台。

三

通过对以先秦至秦汉时期为中心的都城发展历程的初步考察，我们认为整个中国古代都城史可以依城郭形态的不同，划分为两个大的阶段，即防御性城郭阶段和礼仪性城郭阶段（见表一）。由此，可以揭示中国早期都城发展史上的几个重要现象。

（一）在自最早的广域王权国家都邑二里头至曹魏邺城前近两千年的时间里，“宫城+郭区”而非“宫城+郭城”的布局，才是都城空间构造的主流，这一现象可以概括为“大都无城”。这与广域王权国家强盛的国势及军事、外交优势，作为“移民城市”的居民成分复杂化，对都城所处自然条件的充分利用，甚至当时的“天下”、“宇内”思想等，都有一定的关联。

（二）其间只有商前期和春秋战国两个时期为城郭布局的兴盛期，二者都有特殊的历史背景，军事局势的高度紧张是其共性。

（三）战国时期城郭并立的布局，是社会矛盾尖锐、列国对峙兼并这一特定历史时期的产物，前无古人后无来者，并非像以往认为的那样，属于一脉相承的中国古代都城史上一个承前启后的环节。

（四）处于都城发展史早期阶段的防御性城郭的实用性，导致城郭的有无取决于政治、军事、地理等诸多因素，“大都无城”的聚落形态应即这一历史背景的产物；而后起的、带有贯穿全城的大中轴线的礼仪性城郭，因同时具有权力层级的象征意义，才开启了汉代以后城、郭兼备的都城发展的新纪元。